梶原 千恵美さん
俺裁判キャンペーンチームリーダー

それって おかしく ないですか？

声を上げることで変わっていく社会

浜松市在住のトランス男性、鈴木げんさんが申し立てを行っている「オペなしで！戸籍上も『俺』になりたい裁判」（以下、俺裁判）※。キャンペーンチームのリーダーとして関わり、社会運動としての公共訴訟（裁判）を支える活動をする梶原千恵美さん。関わることになったきっかけや、裁判キャンペーンについて、さらに声を上げることの大切さ、などについて話を聞いた。社会に対してアクションを起こすことについて考えたい。

声を上げる仲間を応援したい

『俺裁判』は、げんさんを中心に、5人の弁護士からなる弁護団チーム、医師や大学教員といった専門知識を持つ専門家チーム、社会運動としての裁判を、さまざまな面から盛り上げるキャンペーンチームがタッグを組んで動いているプロジェクトだ。

「始まりは、げんさんの『オペをしないと戸籍の性別が変えられない。そのために望まない手術をしなければならないの？』という、モヤモヤした小さな声だったと思います。それがだんだんと周りを巻き込んでいき、結果、多くの人がボランティアで、仲間として裁判を支えるプロジェクトになりました。社会運動は自分が発信者にならなくても、すでに発信している人に乗っかることで活動ができます。私たちが乗っかる場を作る事で、多くの人がもっと気軽に裁判に関心を持って、賛同してくれるのではないか、運動がもっと拡がるのではないかと思っています。

キャンペーンチームは、賛同を集めたり、『CALL 4※』という公共訴訟を支える寄付サイトへの掲載内容を考えたり、裁判を紹介するパンフレットやチラシを作ったりと、裁判所に提出する書面作り以外のほとんど全てのことに関わっています」

社会運動に関わるきっかけ

梶原さんが政治や社会運動に関心を持つきっかけとなったのは、2011年3月の東日本大震災。当時は東京在住で、その日は営業先の茨城県で被災した。

「東京に戻ることができず、小学校に避難して一夜を明かしました。その後、大変な思いをしながら東京に車で戻りました。東京では、ガソリンも買えない、コンビニに商品が何もない、そんな経験をしましたが、何よりも衝撃を受けたのが、福島県の原発事故です。事故後に、福島県の原発所は、東京で使う電気を発電していると知りました。原発で作られた電気で私たちはのんきに暮らしているのに、福島県は大変なことになっている。何か仕組みがおかしくないか？　と疑問を持ちました」

一つ疑問を持ち始めたら、社会の仕組みがおかしいところが他にもある、と梶原さんは気づいた。

ジェンダーの壁や待遇の格差

「私は自分のセクシュアリティに違和感はありませんが、ジェンダーに対しては違和感を持っていました。今思うと、敢えて世間が思っているような男らしさを出すことで、女らしさの押しつけに反発していたんだと思います」

バイクに乗ったり、髪を刈り上げたり、サッカーをしたり。梶原さん自身が、それまでの自分の行動に納得ができたのは、震災後に疑問を持ったからこそ、と言う。

「就職氷河期より後の世代の私は恵まれていて、地元の大企業に正社員として就職できました。しかし、会社で男性が優遇されているのは今も変わりません。男性ばかりの典型的なホモソーシャルで、居心地の悪い思いを何度もしました。男性が9割を占める会社だから、女性が居心地が悪いのは当たり前だと、疑問にも思いませんでした。でも、居心地が悪いのはどうして？　と疑問を持ってしまうと後戻りできなくて、生きづらいなあと」

梶原さんの職場では、派遣社員の女性は正社員（多くが男性）のサポートをする役割を担っている。「私は特権を持って生まれてきました。就職氷河期世代より少し遅く生まれたことが既に特権だったんです」と梶原さん。しかし、派遣社員として働く、就職氷河期世代の先輩女性たちは、とても優秀でありながら、自分の半分くらいの給料で仕事をしていることにも、梶原さんは疑問を感じていた。

職場での居心地の悪さや、男女の不平等、正規、非正規による待遇の格差など、持ってしまった疑問に対して自分では解決する術もなく、自分の進退も含めて考えるようになった。それならば、とジェンダーの問題や政治や憲法の勉強、支持する候補者の選挙応援など、梶原さんは思い切って外に出て、活動を始めた。

共通する生きづらさの原因

「いろんな活動の中でげんさんと出会いました。どこに行ってもいるんです（笑）」

自分の生きづらさの原因と、トランスジェンダーであるげんさんの生きづらさの原因は、同じところ＝政治にあるのだと梶原さんは気付いた。政治を変えなければ、自分

たちの生きづらさはなくならないと。

「何か社会に向けて働きかけやアクションをしたいけれど、動き方がわかりませんでした。選挙の応援だってできることは限られていたし。自分の進退やジェンダーの問題をどうしようかな、と思っていた時に、ある講演会で、『仕事をしてお金を稼ぎ、その稼ぎでいろんな活動をすればいい』と知り、これだ！と思いました。げんさんに『裁判をするから一緒に活動したい』と誘ってもらって、二つ返事で乗っかりました」

仕事では自分のパワーを発揮する場がなく、悶々としていた梶原さん。裁判のキャンペーンチームに参加することで、持て余していたパワーを発揮できるチャンスを得た。それが今、ライフワークになっていて救われた、と梶原さんは言う。

動ける人が動く

「中学高校時代、スカートは嫌だったけど、選択肢がなくてスカートをはくしかありませんでした。ちょっと嫌だったけど、私はスカートははけた、まあいいか、と流してこれました。でも、スカートが嫌で学校に行けない子ども達はいます。我慢を強いられ、わがままだと言われ、踏まれすぎて傷ついていると、なかなか声を上げることができませんよね。

それなら、私のように余力のある周りの人が動けば良い。嫌だけどスカートははけた、まあいいか、でいけた人に動いて欲しいです。周りの人が、選択肢を増やすためにその人の代弁をする、声を上げる。そんなカルチャーが育つといいです。少数派の人のことも考えたいです。周りの多数派が動く。俺裁判もそうですが、当事者一人（げんさん）に対して非当事者が周りを固めています。そういえば私もそうだったな、我慢したけどあれは不要な我慢だったな、と思えることがあれば、いろんなことが自分事になっていきます。

動いても変わらないこともあるかも知れないけど、動かない限り、声を上げない限り社会は良くなりません。動けば、社会はちょっとずつだけど良くなることを知って欲しいです。そもそも、自分のモヤモヤは自分が動かなければ晴れません。

選択肢を増やして選べるようにする、選択の幅を拡げる活動は、自分の中でテーマになりつつあります。私が役員をしていた労働組合でも、選択肢を増やすことを目標の一つに入れ、明文化したことで、今は共通認識になりました」

将来のために活動する家族

梶原さんの母親も熱心にボランティア活動に取り組む人だ。

「母は震災以降、原発の問題、ペットブリーダーの問題など、知れば知るほど政治を変えなくてはいけないと思うようになったと言っています。選択的夫婦別姓に関してもそうで、私が結婚する頃には実現すると思っていたみたい。でも、まだ別姓が選べないのは、親の世代が政治を変えることをサボったからだと言っています。子ども達の世代にしわ寄せが行ってしまったと。だから今、親子それぞれがいろんな活動をしています」

梶原さんは、夫がオーストラリアの大学で学ぶことになり、家族で移住を考えている。夫はすでに8月からオーストラリアでの暮らしをスタートさせている。

「日本で生まれ育った4歳の娘は、結婚は男と女がするものだ、とアニメなどで刷り込まれています。男の子と女の子だけじゃなく、男の子同士、女の子同士で結婚してもいいと思わない？　オーストラリアはそれができるんだよ、と教えたところ、『パパとママはそうじゃない。自分は嫌だ』と初めは言っていました。でも最近は『オーストラリアは男の子と男の子、女の子と女の子が結婚してもいいなら、みんなそっちに行っちゃって、日本に誰もいなくなっちゃうね』と言うようになりました。同性との結婚も選択肢としてあるなら、選択できる国がいいよね、と。移住の理由を説明する第一歩としてはよかったなあと思っています」

これからの活動

「海外に住んでいても日本を変える動きは続けたいと考えています。今の日本が変わるのを待てない子ども達を日本から出してあげる仕組みを作るとか、何か手伝うことができないかな、外の世界を見せてあげたいな、と思っています。いろんな人のチャレンジを、応援するのが当たり前になるといいです。もっと身近になったらいい。クラウドファンディングへの寄付、署名活動などネットでできることも増えています。俺裁判でも、応援するハードルが低くなるようなプランを企画したいです。

それから、今の社会、意思決定する人の考えが偏っています。自分が嫌だから人にもそうさせないって、子どものままの大人が多くてがっかりしています。自分が良いと思うか思わないかは別の話。自分たちの好みでルールを作るから、学校や会社でも合理性がなく説明できないルールがあります。合理性のないルールや仕組みは変えても良いんだよ、変える事ができるんだよ、というメッセージを、俺裁判のキャンペーンを通して伝えたいです」

あとがき

窮屈でもそこにある規則に従う。納得できなくても、我慢するのが当たり前だ、と多くの人は思っているのではないか。梶原さんの話を聞いて、そこに合理性がなければ、声を上げる。ルールや仕組みを変える運動をし、誰もが無駄な我慢をしなくても良い社会にする必要がある、と改めて感じた。ネット社会のおかげで、今は、気軽に自分の意見の発信、寄付や署名活動ができる。一人ひとりができる範囲でできることをする、そんなアクションの積み重ねが、今の社会をより良く変えていくことに繋がる。小さな声が届く政治、社会にしていかなければならない。

（國井良子）

※俺裁判　「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」の、生殖腺の摘出（内摘の手術）要件を満たさずに「戸籍上の性別を『女』から『男』へ」変更を求める審判を、２０２１年10月静岡家庭裁判所浜松支部に申し立てた。

※ＣＡＬＬ４（コールフォー）社会問題の解決を目指す訴訟（公共訴訟）に特化したウェブプラットフォーム

Select My Life

自分の人生を選び取る

些細な問題から社会が変わるような大きな問題まで、日々、私たちの周りではたくさんの問題が起こっている。問題に気づき、解決しようと行動に移す人が増えたら世の中はもっと暮らしやすくなるのではないだろうか。けれども、実際に行動に移すことができる人はどれだけいるのだろうか。

前泊杏美さんは行動に移すことができた一人だ。地縁のない静岡県で『DV・デートDV（※）防止啓発活動』を行っている。彼女の活動や生き方から、多くの人に、自分の人生は選択次第で変えることができるということを知ってほしい。

前泊（まえどまり） 杏美（あみ）さん

高校生や大学生に向けデートDV防止啓発の講演を行っている。

身近にあったDV

熊本県出身の杏美さん。九州男子という言葉があるように、家父長制の強い土地柄で、物心ついた頃から父親が母親に対して暴力を振るう場面を見て育った。止めに入る杏美さんにも父親は暴力を振るうことがあったが、当時は、怖い、痛い、という感情よりも、母親を守らなければ！　という思いで必死だった。

しかし、杏美さんが高校3年で進学を志していた時、母親が命の危険がある暴力を父親から受け、離婚することに。母親は精神的に追い詰められ知人宅で療養することになり、杏美さんは友人の家に住まわせてもらい、何とか高校を卒業できた。その後、アルバイトをしながら生計を立てている頃、夫と出会い、結婚した。

子育てを機に

2012年に夫の仕事の都合で、名古屋市に引っ越した。知り合いもおらず、孤独な中での子育てが始まった。そんな中、知り合いを増やすために始めたブログは、気づけば東海エリアで上位に入るほど人気になっていた。もともと好きだったファッションについて、「ママだっておしゃれしていいじゃん！」という思いを込めて画像と共に投稿。好評であったが、「おしゃれをしたくても、シングルマザーではお金がないのでできない」というコメントをもらうこともあった。

また、実際に繋がることのできる場を作りたくて、ブログに共感してくれた近隣のママたちと一緒に座談会を始めた。住んでいた土地柄、シングルマザーや子どもを児童養護施設に預けている母親などとの出会いがあり、子育ての悩みなどを共有してきた。

困っている母親たちと出会い、自分にできることはないかと考えていたが、その時は行動に移すことができずにいた。そしてそのまま、夫の仕事の都合により、静岡市に引っ越すことになった。

気づきからの行動

静岡市でも同じようにSNSを使い、場づくりを始めた。同時に、困っている人のためにできることを考えた。静岡市で出会ったママ友と意見を出し合い、着なくなった子ども服を提供したら喜ぶのではないか、と思いついた。そして、これまでにブログを通じて知り合った全国の仲間に声を掛けた。すると、手作りで服を作ってくれる人、ブランドの服を提供してくれる人など、多くのママたちが共感してくれた。ほとんどの人が「気持ちだから…」と、送料を各自で負担してくれた。

集まった子ども服は、児童養護施設に寄付したいと思っていたが、ママサークルの立場ではできないことを知った。寄付する側が法人格を持っていることが条件であった。杏美さんは、法人格を持つことで寄付される側の安心感を得ることができ、社会的信用が増すのであればと思い、女性や子どものための「NPO法人ルークス」を立ち上げることを決めた。

杏美さんの母親が福祉系のNPO法人を立ち上げていたこともあり、杏美さんの中ではNPO法人を立ち上げることは身近なことであった。子ども服は、寄付するだけでなく、座談会やフリーマーケットのイベントに出展し、10円程度の価格で提供した。利益は出なかったが、喜んでくれる人がいることがとてもうれしかった。

このような活動をしている中で、NPO

法人ルークスについての質問や、ＤＶ相談をしているかという問い合わせが数件あり、身近にＤＶの問題があることに気づいた。

そんな時、静岡市が、「ＤＶ防止に向けた啓発事業」を協働する団体を募集していることを知った。ＤＶについて、解決するための手伝いができるのではないかと考えた。

当事者として

杏美さんは、「ＤＶはいきなり被害者・加害者になるのではなく、その前の段階があるはず」と考えていた。それは、杏美さん自身が学生時代、デートＤＶの被害者・加害者を経験したことによる。今の夫となるパートナーに出会うまで、杏美さんは相手から束縛されることが愛情表現と感じており、相手にそれを求めた。関係が悪化し別れることになったにもかかわらず、次のパートナーにも同じように、束縛する恋愛をした。

けれども、今のパートナーは、あきらめずに何度も、杏美さんの愛情表現が間違っていることを伝えた。相手を縛ることは自分を縛ることにもなる、もっと自分を大切にしてほしい、と杏美さんに伝えた。杏美さん自身も自分の家庭環境を振り返り、自分を変えていきたいと考えるようになった。パートナーとコミュニケーションを重ねることで、徐々に束縛することが減り、結果的にデートＤＶから抜け出すことができた。

このような背景から、ＤＶを経験する前の若年世代に届くような事業を行いたいと思った。杏美さんは当時20代。自分と世代の変わらない若者が普段情報を得る方法は、ＳＮＳの動画だと考えた。デートＤＶの正しい知識を普及するプロモーションビデオを作成し、それをＳＮＳで広報することを、静岡市の協働事業として提案し、採択された。

静岡市と何度も打ち合わせを重ね、ＤＶの有識者から意見をもらいながら、プロモーションビデオの制作を行った。広報は、ＹｏｕＴｕｂｅを使用し、10～20代にターゲットを合わせて配信。七千回以上視聴された。静岡市との協働事業が終わっても、プロモーションビデオの視聴者から、団体についての問い合わせを受けた。また、制作の際に監修を受けた有識者から、「デートＤＶに関する当事者目線の講座を教職員向けに行ってほしい」と依頼があった。その講座の反響から、教育機関での講演の依頼が来るようになった。

講演に対する思い

自分にデートＤＶから立ち直った経験があるから、当事者に寄り添うことができると杏美さんは考えている。また、杏美さんの夫は、当事者である杏美さんを救った経験があり、活動を一番理解している存在だ。杏美さんの考えが、当事者の経験から客観的になれず偏ってしまう時は、夫が指摘し、二人で意見を出し合いながら講座内容を決めている。

実は、杏美さんはＤＶが原因で友人２人を亡くしている。一人は、熊本県にいた時の友人で、ＤＶを受けている話を聞いても、何も動くことはできなかった。もう一人を亡くしたのは、静岡市の協働事業に関わった後。ＤＶに関する知識もあり、パートナーと一緒にいるのは危険だと感じ、友人に別れることを強く勧めた。自宅にかくまうこともあったが、結局、友人はパートナーのもとに戻り、最終的に自死を選んでしまった。

そんな辛い経験もあり、多くの人にＤＶ・デートＤＶについて知ってもらいたいと思っている。ＤＶ・デートＤＶと気づいた時点で、パートナーを更生させようという気持ちを持つより、自分を大切にしてほしい、別れることも選択してほしいと言う。

講座終了後は、直接杏美さんに相談できるよう、ＳＮＳの相談先を伝えている。相談を受ける際は、最後の判断はできるだけ本人に決めてもらっている。自分で決めた判断であれば、納得して行動できるからだ。杏美さんは、今後も依頼があれば、自分だからこそ伝えられる声を届けていきたいと思っている。

現在、ＤＶの被害者が別れを選択できたとしても、身の安全を確保するための居場所は多くない。社会問題を解決できる方法を模索しながら、ＮＰＯ法人ルークスのホームページも作成中である。

学校での講演の様子

あとがき

どんな人にも始まりの一歩はある。杏美さんは、家族、友人を通して、辛い経験をした。しかし、経験をそのままにせず、パートナーの協力のもと、問題解決に向けた人生を選んだ。そして同じような問題に直面した人に、自分の経験を伝え、解決に向け寄り添っている。自分に起きた困りごとに対して、改善に向けた一歩を踏み出すこと、それは自分の問題解決だけでなく、他の誰かの役に立つ経験になる。今、一番問題だと思っていることに対して、私たちは、どんな行動を選択しているだろうか？　私たちも、解決に向けた一歩を選択していきたい。

（其田育子）

※交際中の恋人同士の間で起こる暴力のこと　デートＤＶ防止パンフレット　静岡県公式Ｈｐ参照

介護職を選択する

かつての介護と言えば、家族、その中でも特に女性が行うものとされていました。2000年になって介護に係る家族の負担を軽減し、社会全体で支えることを目的にした『介護保険制度』が創設されました。そして現在、少子高齢化が進む中、介護職の現場は、いったいどうなっているのでしょうか。

女性従業員の多い介護の現場では、女性が働きやすい環境整備が進められています。厚生労働省の女性活躍推進法の認定制度「えるぼし」を取得した（株）アクタガワの白鳥洋平さんにワーク・ライフ・バランスの取り組みなどについて聞きました。さらに社員の池田優哉さんに、同じ会社で勤務する妻の働き方や、子育て世代の男性として介護職に対する想いを聞きました。

（株）アクタガワの女性が働きやすい職場づくり

白鳥 洋平さん
管理本部
人材開発グループマネージャー

◆「えるぼし」の取得

一言でいうと「女性が働きやすく、活躍している会社だと厚生労働省が認定した」ということです。（株）アクタガワは2022年3月に、三つ星に認定されました。「採用」「継続就業（勤続年数）」「労働時間（時間外労働など）」「管理職比率」「多様なキャリアコース」の5つの評価項目があり、基準を満たしている項目数に応じて取得できる星の数が決まります。わが社は、5つの基準を満たしているので三つ星です。

もともとダイバーシティ（多様性）経営をしており、いろんな人が働ける職場作りに取り組んでいました（経済産業省主催平成30年度 ダイバーシティ経営企業100選にも選定）。障害のある人、シニア、外国人、そして子育て中の女性などが働きやすい職場を作るための制度を作っています。例えば、病児保育のある企業主導型保育園の設置やシングルペアレント応援手当、CC（チャイルドケア）社員制度（子育てコースで時短で働ける。法律では3歳までだが社内制度は小学3年生まで）だけでなく、介護などのために利用できる制度もあります。社員は女性が7割を占め、その中には子育て中の社員もたくさんいます。そんな会社として培ってきた風土があります。

「介護」という仕事を選んで

池田 優哉さん
ぺんぎん福祉用具サービス
福祉用具専門相談員
福祉住環境コーディネーター2級

◆なぜこの仕事に？

以前は電話応対がメインの仕事をしていました。お客様の顔を見てやりとりする方が楽しいなあ、と感じていた時に会社が倒産。転職を余儀なくされました。次の仕事は人の顔を見て、人と接する仕事がしたいと思っていました。祖父母が大好きだったこともあって、高齢者の役に立ちたいとも。そんな時に介護職の中の福祉用具専門相談員という仕事に出会いました。8年前のことです。

現在、福祉用具専門相談員として、高齢者の自宅環境の整備、具体的には福祉用具レンタル、自宅改修、福祉用具の販売などを行っています。介護保険を使う時は、最初にケアマネジャーがいろいろ話を聞き、サービスの中に福祉用具が必要だと判断すると、こちらに声が掛かります。

福祉用具を設置後、半年ごとに福祉用具の点検のために各家庭に出向きます。その時、用具の安全確認をしながら、利用者の顔や様子を見ることができます。同時に日常の困りごとなどをさりげなく聞き出したりしています。介護の支援は、ケアマネジャーをはじめ女性が多いので、私が訪問すると「あ、男の人が来た～」って感じになります（笑）。でも特に自分が男性だからと特別に感じることはありません。

親からはやりがいのある仕事だと背中を

車いすの安全確認

介護業界は慢性的な人材不足です。たくさんの人が入社して、制度を使って定着することで、人も会社も成長すると考えています。職員の生きがい支援だけでなく、本人の希望を聞いて、もとに居た職場にこだわらず、その時の希望に合った職場を探すスタンスです。会社が働く人、一人ひとりに合わせることも多様性です。子育てが一段落したら、また正社員に戻る、など選択できることが重要です。女性が働きやすい職場。男性も女性も関係なく生きがいを追究できる職場です。

押してもらいました。先月も祖父母がちょっとした介助が必要な状態になっていた時に、風呂場に手すりを付けることを提案しました。「また一人でお風呂に安心して入れるようになった」と喜んでくれました。祖父母の力になれてうれしかったです。

◆夫婦の働き方と ワーク・ライフ・バランス

妻とは社内で知り合い結婚して6年、子どもは2歳になります。

妻は総合職で入社し、訪問介護を経験した後、本社の総務事務をしていました。妊娠時はCC制度を使い正社員で短時間勤務をしました。産休育休後は、パートとして保育園の事務をしています。

生活の変化に伴って勤務可能な日数に応じて、正社員からパートへの変更ができ、希望すれば正社員に戻れるので、妻は同じ会社で仕事を継続することができています。生活の状況に合わせて勤務形態を変えられる制度があるので助かっています。

池田さんファミリー

制度は男女の区別なく使えますが、今のところ妻が制度を利用しています。職場内にも子育てを応援するムードがあり、私も早く帰って子どもと一緒にお風呂に入る日もあります。

私は残業や、休日に出勤する日もあったりしますが、朝は子どもにご飯を食べさせ、休みの日は基本的に子どもと一緒に過ごしています。

（株）アクタガワの経営理念の中に「人間の生きがいを追究すること」とあります。会社のクラブ活動でランニングを始めました。自分の生きがいも強く意識するようになりました。

この趣味もこの会社に入らなければめぐり合わなかったと思います。今では通勤もランニングでするほどです。大会にも出たりしています。

◆介護職は、ありがとうと 言ってもらえるサービス業

若い世代の人たちには「おじいちゃんやおばあちゃんは少しずつ年を取っています。小さな時から、ご飯を食べるなど、一緒に過ごす時間を大切にしてください」と伝えたいです。「介護職は大変だ」というイメージを持つ人が多いように思いますが、実際は、社会の役に立ち、これほどやりがいのある仕事はありません。これからの40年で少子高齢化がますます進み、高齢者が増えるので、介護の仕事は社会の中でより大きな役割を持つと思っています。

自分の仕事に誇りを持つことができる介護職は「ありがとう」と言ってもらえるサービス業です。この業界に入るまで知りませんでしたが、介護保険を使うことで安心・安全が増え、高齢者本人はもとより家族の介護負担も減ります。日常生活が大変になったら、市役所や地域包括支援センターなどに相談してみて下さい。ケアマネジャーや業者も自分で選ぶことができますよ。

大会に出場！

あとがき

女性の多い介護の現場で働く男性は、女性が働くことや介護職に対してどんな気持ちを持っているのだろう、と思っていました。

池田さんが担当している福祉用具専門相談員は、介護の中でも比較的男性の多い分野です。高齢者や障害のある人が、自分でできることを減らさない、一人でできる環境を作る、そんな役割を担っています。使っている福祉用具がいつもベストな状況で使えるように、訪問して用具を確認し、ねじを締めるなどの安全点検もしているそうです。福祉用具といえば介護ベッドや車いすが目に浮かびますが、「一番多いのは手すりです」とのこと。確かにそれがあれば、一人でできることも増えそうです。

「休みの日に、街の中で見かけた人の杖が気になったので、声掛けして調整させてもらったこともあります」という池田さんは、福祉用具のプロであり人と接することが好きなことが伝わってきました。

介護業界に対してネガティブな話がクローズアップされ、マイナスなイメージを持っている人が多いと聞きます。社員一人ひとりに寄り添い、楽しくやりがいを持って働くことができる、それぞれの人生のステージに合わせて働き方を変えながらキャリアを継続していける、そんな職場もあることを今回知ることができました。女性が柔軟に働き方を選べる職場は、男性の働き方も柔軟に選択できるはずです。まずは女性の働きやすい会社の目安となる「えるぼし」を、職業選択の際の情報の一つとして、役に立ててほしいです。

（佐藤みゆき）